

金沢城下町遺跡における漳州窯系陶磁器の変遷

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 相羽, 重徳 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/2817

卒業論文概要
**金沢城下町遺跡における漳州窯系陶磁器の
変遷**

相羽 重徳

漳州窯系陶磁器は明末清初の政権交代の動乱期に突如、世界海上貿易の表舞台に登場する、粗雑な焼き物のことである。我が国では「呉州手」「呉州赤絵」などと呼ばれ、西欧で

は“SWATOW WARE(スワトウウェア)”と呼ばれる。その生産地やその生産形態などは、長らく不明とされてきたが、1993年の窯跡の発掘調査を始めとして、近年の、中国における調査の進展によりその実体が明らかになりつつある。消費地である我が国では、窯跡発見以前より、その存在は、染付の分類上において認識されていた。これら漳州窯系陶磁器は既に知られているように16世紀末から17世紀にかけての遺跡で出土する。本稿が対象とする「金沢城下町遺跡」においても例外ではなく、漳州窯系陶磁器の出土がみられ、また、近年の近世遺跡の発掘調査の増加に伴い資料が充実してきている。そこで、それらの資料を用いた編年案の提示、景德鎮窯系陶磁器との出土比率の検討を行い、金沢城下町遺跡における漳州窯系陶磁器の変遷を明らかにすることを本稿の目的とする。

本稿では、第一に、生産地である中国福建省漳州地区の漳州窯系窯と製品について概観し、漳州窯系陶磁器の特徴を定義した。第二に、その定義に基づき金沢城下町遺跡における出土品から抽出した漳州窯系陶磁器を用い、編年案を提示した。時期区分は共伴する肥前陶磁器の様相により、期から期に区分した。ここでは、各期ごとの、器型及び組み合わせの変化をみていく。同時に、既に発表されている各地の編年との比較をおこなう。第三に、景德鎮窯系陶磁器と漳州窯系陶磁器の出土比率を各遺構、層位ごとにみていく。計測方法は接合後の破片数計測である。比較対照として大坂城での比率もみていく。

以上の分析を通じて、得られた幾つかの知見を「まとめ」として第5章に記した。すなわち、期(16世紀第4四半期)では、大坂城における同時期の漳州窯系陶磁器の様相に比べ、やや前時代的であり、景德鎮窯系陶磁器との出土比率も低率となっている。期(17世紀第1四半期)では、出土比率を大幅に増加させ、大坂城の出土比率に近い値を示す。器型に関しても、大坂城で新出するタイプが時を同じくして金沢でも搬入されており、また、同時期の大坂城の様相に類似することから、期にみられた大坂城との格差はほぼ解消されたといえる。期(1620年代-1630年代)では、さらに器型のバリエーションが増える。城下町における漳州窯系陶磁器の比率はほとんど変化はしていない。しかし、金沢城に近接した遺跡と城下町の生活遺跡では様相に格差がみられるようになる。期(1640年代以降)

では、漳州窯系陶磁器の比率にほとんど変化はみられない。器型に色絵の碗がみられる。

期(17世紀末)では、良好な資料が得られなかったが、中国陶磁器の輸入割合から推測すると、伝世品の可能性が高いといえる。

本稿で提示した事柄はすべて、事象の追認である。それらを通じ、多くの疑問・課題が残された。一部は本稿中にも述べた。事象の把握は、研究の第一歩である。今回、第二歩目である、その「要因」について、回答を何ら用意することが出来なかった。まことに残念なことであり、筆者の力量の無さを痛感した。より多角的な視点による検討の必要性を感じている。